

貨幣経済の浸透と儀礼をめぐる社会関係の変容

——中部タイの稲作村における冠婚葬祭——

鶴 田 格*

Penetration of Monetary Economy and Social Change in a Central Thai Village: A Diachronic Analysis of Economic Aspects of Rites of Passage and Gift Exchange

Tadasu TSURUTA *

Thanks to constant technological innovation in rice farming, there has been considerable economic growth in rural areas of Central Thailand since the 1960s. In K Village, a progressive rice-growing village in Suphanburi Province, the rice crop has doubled over the past thirty years and the income level of farmers has increased considerably. With the infiltration of the monetary economy and the rise of the standard of living of the villagers, a lavish style of celebration had spread on various ceremonial occasions including the rites of passage sponsored by each household, such as weddings and ordinations. Many villagers nowadays celebrate these occasions by giving a banquet of Chinese cuisine accompanied by a professional band, imitating the wasteful style of wealthy urban dwellers.

The increased expense of these ostentatious and costly functions has also boosted the amount of money gifted, which is reciprocated on these occasions among villagers and their relatives and friends living outside the village. There has also emerged an equivalent monetary exchange system with rather clear and strict rules, which has weakened the personal and religious significance that former gift exchange had often had. The formations of such a standardized gift exchange system and its escalation have primarily been caused by the widespread use of money as a medium of exchange. Money is (1) an universal standard of value and (2) an impersonal and convenient instrument of exchange. Therefore, the formation of such a monetary exchange system is associated with, and promotes, the formalization and dilution of personal relationships between villagers, who now have close connections with people outside the village in various aspects of life.

はじめに

タイ国中部のデルタ地帯にある稲作村落の多くは、1960年代よりさまざまな技術革新を積み重ね、高い稲作の生産性を実現してきた。その中部地方のなかでも優等生的な稲作先進地スバ

* 京都大学大学院農学研究科； Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto 606-8502, Japan

ンブリー県にある筆者の調査村 K 村においても、長年近代的技術の導入に基づく商業的稲作が営まれてきた。その結果現在では、以前にくらべコメの単収は倍増し、農家所得も増え、衣食住はもとよりテレビや冷蔵庫の普及など他の物質的な面での消費生活も充実している。そこでは、生産と消費とを問わず生活のあらゆる側面において貨幣経済が深く浸透している。

かかる社会経済的变化にともなって、個人の通過儀礼や積徳行などの宗教的行為として重要な意義をもつと同時に親族・知人との交流や主催者の社会的存在の表明の場でもある冠婚葬祭の形態も、大きく変化した。まず上記のような生活水準の向上と同時に筆者の目を引いたのは、各世帯の主催する得度式や結婚式などの祝い事の儀礼の際に行われる祝宴の規模の大きさと贅沢さである。そこでは、隣人との協力のもとに料理を準備し、みずから歌い踊って楽しむような伝統的なスタイルの宴会は影をひそめ、仕出の専門業者による中華料理の祝宴と流行の大衆歌謡を演奏するプロの楽団がとってかわっている。かかる自己顕示的な祝宴の浸透と並行して、冠婚葬祭の機会に世帯間でやりとりされる祝儀や不祝儀の金額も増大しており、それは各世帯の家計に対して大きな負担となっているのみならず、隣人どうしの間にもぬきさしならない債権・債務の関係をひきおこしている。このように、村落及びその外延的に拡大された社会関係の再生産の場でもある冠婚葬祭とそれに付随する贈与交換は、貨幣経済の浸透とともに、従前とはかなり異なった様相を呈している。

これまで、中部タイの農村部において現金収入の機会が増えるにつれて儀礼が派手になり、それに伴う出費も増加していく傾向はすでに指摘されている [友杉 1977: 86; 北原 1985: 140-143; 1987: 348]。だが、それが量的にどれほどの規模なのか、あるいはそれが村落の社会関係のどのような変化を反映しているのかについては、いまだ明らかにされていない。そこで本稿では、祝宴をもふくめた冠婚葬祭の全体をひとつの消費の体系として捉え、もっぱらその経済的側面に焦点をあてることによって、1960年代以降、生活のあらゆる側面において貨幣経済が浸透していくにしたがって主要な冠婚葬祭とそれをめぐる贈与交換の形態がどのように変容してきたかを検討したい。次いで、それが村落の社会関係のどのような変化と関わっているのか、ということについて議論を進めたいと思う。

なお本稿で扱うデータは、すべて筆者がフィールド調査（1991年7月～10月及び1993年9月～94年7月）の過程で収集したものである。¹⁾

1) 冠婚葬祭とそれに伴う贈与交換に関わるデータは、主として次の方法によって収集した。まず冠婚葬祭の規模と形態の歴史的な変遷を量的に把握するために、無作為に選んだ50世帯について過去に各世帯で行った冠婚葬祭の様子について聞き取りを行った（表3-表6及び表8）。次に、比較的完全に近い形で入手できた各時代の世帯の「祝儀帳」や「不祝儀帳」をもとに、世帯間でやりとりされる祝儀・不祝儀の交換形態の変化を検討した（表9-表13）。

I 調査地

K村 (Ban K) は、タイ国中部スパンブリー県の北端、シンブリー県およびチャイナート県との県境付近に位置する (図1)。首都バンコクから村までは約150キロ、車でわずか2～3時間の距離である。

K村はもともと、シンブリー県のノイ川とチャオプラヤー川にはさまれた氾濫原にあるM村からやってきた人々によって1920年代にひらかれた開拓村である。²⁾ 開拓当初のK村では、自給用の水田稲作のほかにトウモロコシなどの畑作物生産や、在村の中国人による商業用のタバコ作なども行われていたが、次第に商業的な稲作が主流となり、90年代初頭まで主たる生業として圧倒的な地位を占めていた。1960年前後に人工運河が掘削されたのを皮切りとして、現在では灌漑が村のほぼ全域に普及している。さらに、1970年代後半からは乾期にも放水が行われるようになり、コメの二期作が可能となった。

K村は、人口約600人、160世帯からなっている (1991年筆者調査)。数の上でも権勢上でも最も優勢な親族は、村の創立者であるM村出身の故N翁の直系および傍系の子孫である。別の有力な集団として、同じノイ川近辺のP村からきた一族がある。親族別の世帯数をみると、

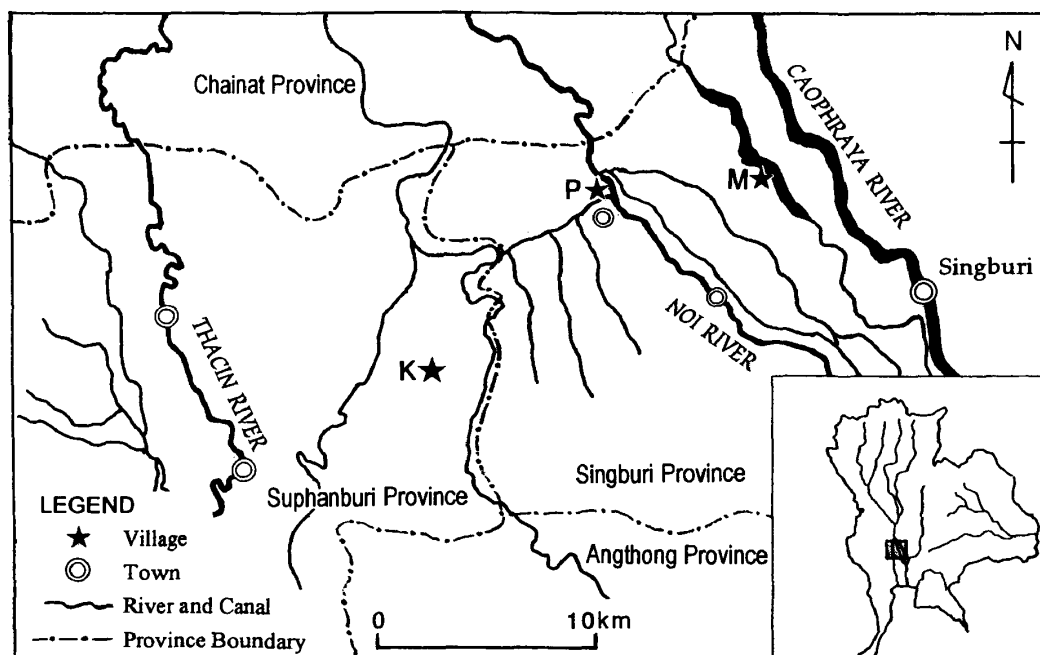


図1 調査村とその周辺

2) チャオプラヤー=デルタ上流部のノイ川近辺は、アユタヤ朝時代からさかえていた重要な米作地であったが、19世紀なかば以降のデルタ下流部における爆発的な開拓ブームの影響は直接的にはうけることなく、その西方には未耕作の荒蕪地が広がっていた。それが本格的に開拓されはじめたのは、今世紀初頭以降のことである [Tanabe 1979: 3-4]。

前者が60世帯、後者が40世帯、双方にまたがっているのが6世帯、つまり両者で全世帯数の66%を占めており、比較的濃密な親族関係が存するということができる。また結婚後の妻方居住の傾向が顕著にあり、とくに草分けのN翁の一族の女性は色濃い親族集団を形成している。また他方で、その親族にはバンコクなど村外に住む者が増えており、その数は現在では村内に居住する親族の数を大きく上回っている（図2）。

1991年の時点で、160世帯のうち農業をいとなむのは127世帯（約8割）である（表1）。稲作世帯123世帯の1991年雨期の経営面積の平均は23.4ライ（1rai=0.16ha）であり、各世帯の稲作経営面積は3ライから64ライまでかなりの格差とバラツキがある（表2）。したがって、表1にあるように自作農の比率は6割以上と比較的高いとはいえ、村内の各世帯の経済状態の格差は小さくないことがわかる。稲作を行っていない農家4世帯はサトウキビを生産し、また稲作農家の中でもサトウキビ作を同時に行っている世帯が若干あるが、いずれも80年代末までは稲作のみを行っていた。

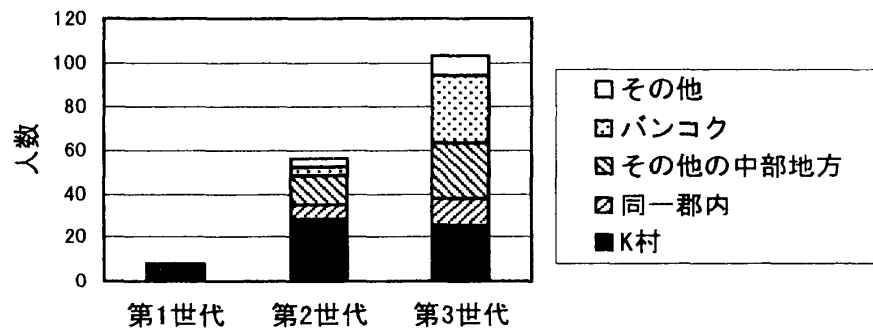


図2 N翁直系子孫の現在における居住地

出所：1991年筆者調査。

注：第1世代はN翁の子供、第2世代は孫、第3世代は曾孫の代をあらわしている。

なお、第2・第3世代でK村以外の地域で生まれ育った者は除外している。

表1 K村の就業構造

	世帯数		構成比 (%)
	農業	自作	80 (63.0%)
	自小作	20 (15.7%)	12.5
	小作	27 (21.3%)	16.9
	小計	127 (100%)	(79.4)
商業		5	3.1
公務員・従業員		13	8.1
農業労働・雑業		10	6.3
その他		5	3.1
小計		33	(20.6)
合計		160	(100)

出所：1991年筆者調査。

表2 稲作経営面積の世帯別分布 (1991年雨期)

経営面積 (rai)	世帯数 (%)
-10	36 (29.3)
-20	34 (27.6)
-30	20 (16.3)
-40	12 (9.8)
-50	13 (10.6)
51-	8 (6.5)
計	123 (100)

出所：1991年筆者調査。

K村の稲作においては、1980年代から移植法にかわる発芽粒直播法という省力的な新技術が普及した。1991年雨期には水稲作付面積の85.9%、乾期にはほぼ100%においてRD23という高収性品種による発芽粒直播法がとられている。また現在では耕起や刈り取り、脱穀作業などの主要な稲作作業における機械化がほぼ完了し、伝統的な形態の相互扶助的労働交換はあまり行われず、労働力が必要な時には雇用労働に依存する場合がほとんどである。かかる稲作技術近代化の結果、K村における水稲の平均収量は、中部タイ諸県の平均収量と比べてかなり高いレベルにある [Prawet 1989: 17; NSO 1990: 153-154]。また郡農務局の資料によると、1989年の時点でK村の属するT行政区 (Tambon T) における一年間の平均的な所得は45,000バーツ (1991年時点で1バーツ=約5.0円) 程度であり、これは中部地方の農村部全体の平均とほぼ変わらない数値である [Prawet 1989: 14; NSO 1990: 414-417]。

次に、まず中部タイの農村部における冠婚葬祭に関する概観から始めたい。

II 中部タイ農村の冠婚葬祭

1. 中部タイの冠婚葬祭

現在の中部タイの主要な冠婚葬祭 (*ngan*)³⁾ には、結婚式 (*ngan taengngan*)、得度式 (*ngan buat*)、葬式 (*ngan sop*) などの通過儀礼や、死後百日目に行う百日供養 (*tham bun roi wan*)⁴⁾ などの法事がある。またこの他にやはり各世帯によって主催される重要な儀礼として、家屋の新築祝い (*tham bun ban*)⁵⁾ をはじめとする各種のタムブン儀礼⁶⁾ がある。これらのなかでも女性にとっての結婚式⁷⁾ と男性にとっての得度式⁸⁾ は、式の主催者である両親にとっても本人

3) *ngan* は多義的な言葉であり、各世帯の主催する冠婚葬祭以外にも、一般に「仕事」を意味するほか、仏教儀礼などを含む公共の儀礼イベント一般を指す。

4) アヌアーン [1984: 306-308] によれば、「七日供養」「五十日供養」「百日供養」などの、死亡日からの日数によって供養をいとなむ習慣は、本来中国やベトナムの慣行であり、タイではラーマ五世時代 (1868-1910) から行われるようになった。K村付近においても、「百日供養」の習慣は近隣の中国系住民の影響によって数十年ほど前に始まった比較的新しい習慣であると考えられる。

5) *tham bun ban* は家屋の新築、増築などにさいして家内安全を願う儀礼であるが、とくに新築時に行われることが多いので、ここではこう呼んでおく。

6) タムブン (*tham bun*) とは、上座仏教徒が功德 (*bun*) を積む行為のことであり、主要なタムブンの行為として、寺や仏僧へのお布施や寄進、出家、寺院建立などが挙げられる。僧を家に招請して読経を聞き、これに食物と金品を寄進するというタムブンの儀礼は、ここに挙げた百日供養や新築祝い以外にも、今後の事の成就を願うという意味をこめて、誕生日など様々な機会をとらえて行われる。

7) 結婚式は、一般に式・祝宴とも新婦方で行う。なお、女性が特定の男性とむすばれる際には、正式な手順をふんで結婚式をとり行うのがのぞましいとされているが、婚資その他の条件で双方の折り合いがつかない場合、カップルの判断によって「かけおち (*pha ni*)」が実行されることがある。一定期間身を隠した後、最終的には双方の両親に許されて夫婦生活をはじめることになるのだが、この場合は婚礼の儀式や祝宴は一切行われぬのが普通である。K村の事例をみるかぎり、従前はこの「かけおち」がかなりの頻度で行われていたが、近年その割合は極端に減少している (表4参照)。したがって現在では、結婚式の開催される頻度も以前に比べて増えているのだと考えられる。

にとっても非常に重要な通過儀礼であり、もっともその準備に力がそそがれ、大規模な祝宴をとまなうことが多く、開催される頻度も最も高い。したがって以下本稿では、おもに得度式と結婚式を中心として論をすすめていきたい。

一般に得度式や結婚式など祝い事の *ngan* は、主として朝から昼間にかけて行われる宗教的な手続きとしての「儀式 (*phithi*)」と、主として夕方から夜にかけて行われる「祝宴 (*kin liang*)」の二つの部分からなる。「儀式」においては、タイの国教である上座部仏教の僧侶が大きな役割を果たす一方で、土着の精霊 (*phi*) 信仰や魂・生霊 (*khwan*) 信仰に基づく儀礼も行われていた。「祝宴」においては、通常、招待客に料理が供されると同時に、音楽などのパフォーマンスを主とした余興がつきものである。ただし、主催者の経済状態によっては得度式や結婚式において夜の「祝宴」を一切省略し、朝の「儀式」の主要部分のみを簡潔に済ませる場合がある。

冠婚葬祭は、個人の通過儀礼として重要な意味を持つと同時に、主催者をめぐる社会関係が顕現する場でもある。主催者の親しい親族や友人知人は、料理の準備や儀式の段取りを手伝うと同時に、儀式と祝宴の双方に参加し、また贈与を行う。かかる手伝いや贈与は相互扶助の一種と意識されている。また、それほど近い関係にない人々は、多くの場合夜の祝宴のほうにのみ出席し、同様に贈与を行う。現在では一般に祝宴には儀式よりも多くの客が招待され、いかに大規模な祝宴を催すかがその人の社会的ステイタスをあらわすとみられている。

次に、K 村近辺において1960年代以前に行われていた得度式・結婚式における主要な手順について、簡単にみておこう。

2. 1960年代以前の得度式と結婚式の形態⁹⁾

従前の得度式においては、出家の前日は「タム・クワンの日 (*wan tham khwan*)」と呼ばれ、剃髪した僧志願者に対してタム・クワン・ナーク (*tham khwan nak*) と呼ばれる儀礼が在村のバラモン師 (*mo tham khwan*) によって行われるのが一般的であった。これは、人間の身体にやどり、その健康状態や運命を左右すると考えられている生霊 (*khwan*) を、僧志願者 (*nak*) の体内につなぎとめ、強化するための儀礼である。バラモン師は、まず神々の降臨を招請したあと、僧志願者が恩義をうけた周囲の人々、とくに母親が出産や養育に要した苦労や、得度にあたっての心得などを織り込んだ物語を、通常3時間ほどにわたり詠唱する [小野沢 1983;

8) タイの仏教徒においては、一般に男子は20歳をすぎたら一定期間 (理想的には雨安居の3カ月間) 出家するのが理想とされている。新人出家者の入門式である「得度式」は、一種の成人式の意味あいをもつうえに、本人や周囲の人々、とりわけ本人の母親に大きな功德をもたらす、と考えられている [Kaufman 1960: 148, 183-184]。

9) 中部タイ農村の祝い事の儀式、とくに婚礼のそれについては、アヌマーン [1984: 137-262] や Kaufman [1960: 151, 153-156] にみられるようになりにかなり地方的なバラエティがある。ここに記述するのは、あくまで K 村近辺の事例であることを断っておきたい。

Kaufman 1960: 202-203]。同儀礼へ出席した親戚や知人は主催者に対して祝儀を贈るのだが、これは相互扶助のしるしであると同時に、タムブン（積徳行）の行為であるとも認識されていた [Tomosugi 1980: 32]。また、同儀礼が行われたあとはそのまま主催者の親戚・知人や年若い僧志願者の友人たちによる酒と踊りと歌を伴う祝宴が夜を徹して行われた [loc. cit.; Kaufman 1960: 202]。得度式は、その翌朝、寺院の布薩堂において僧侶によって執り行われる。

従前の結婚式の前夜には、新婦方の実家で、新郎新婦とくに新婦の若い友人たちが集ってファオ・ホー (*fao ho*, 新居の番をする) と称する祝宴を開き、新婦に対して贈り物を贈った。この日は「新居の番をする日 (*wan fao ho*)」と呼ばれた。¹⁰⁾ 翌朝の婚礼においては、同じく新婦方の家において僧侶の読経の後、聖水そそぎの儀が行われ、続いて新郎が結納金などを持参して新婦の家に赴く過程を象徴的に表現したパレード（カンマーク行列）が行われる。その後、セン・ピー (*sen phi*) という祖先の霊 (*phi*) を拝礼・供養する儀礼 [アヌマーン 1984: 207] を行う。家の中柱の許に供物をそなえ、同儀礼に関して知識のある者が呼ばれて押韻のある祈りの文句を唱えるのだが、それは祖霊に対する祈りの言葉であると同時に、結婚生活を営むにあたっての夫婦の心得なども含んでおり、新郎新婦への説教の意味をも有していた [Anuman 1958: 78-80]。最後に年輩の親族等による新郎新婦に対する祝福の儀礼ラプ・ワイ (*rap wai*) を行う。そこでは年長者が、新郎新婦の腕に祝福の意をあらわす木綿糸をむすんでお祝いの言葉をかけ、その際祝儀として、金銭のはいった封筒が新郎新婦に手わたされる。また年長者以外の参集者からは、主催者である新婦の両親に対して祝儀が贈られたが、これは当日招請した僧に寄進される場合も多かったため、タムブンの一種としても認識されていた。

このように、従前の得度式と結婚式の儀式部分においては、土着の精霊・生霊信仰等に基づく儀礼がある程度時間をかけて行われていた。また夜の祝宴に関しては、それは単なる宴会以外の意味付け（ファオ・ホーなど）がなされることがあったほか、基本的に儀式が行われる空間と同じ空間（屋内）において、タム・クワン・ナークなどの儀式部分と時間的にも隣接した形で行われていたことに注目しておきたい。換言すれば、当時の祝宴はさほどそれ自体独立した領域としての意義を有しておらず、それはいわば式全体のなかに溶け込むような形で存在していたと考えられる。また客から主催者への贈与は、単なる隣人間の相互扶助の一環として行われていたのみならず、Kaufman [1960: 183] が強調するように、それにタムブンという宗教的意義付けがなされる局面が多く存在した。

当時の祝宴や儀式において供される料理は、コメや野菜、豚、魚など身の回りにある自前の

10) これは、夫が婚前に妻方の屋敷地に新居を建て、妻が新居入りするまで独りでその番をする [アヌマーン 1984: 179-180, 222, 239-244] という、K村付近においてもおそらく1930年代頃まで行われていた伝統的な慣習の名残であると考えられる。

食材をおもに使って、隣人との協力のもとに、すべて手作りで用意されていた。式の前日から近在の親戚や知人があつまって、大量の料理や菓子類を作るのを手伝ったのである。¹¹⁾ また、多くの場合知り合いのつてなどを頼って村内や近隣村から呼ばれる伝統音楽を演奏するアマチュアの楽団は、祝宴の余興として演奏すると同時に、儀式においても伴奏に活躍した。これら楽団や上記精霊・生霊儀礼の執行者は、主催者から金で雇われるというよりも、知り合いなどが無料奉仕したり、あるいは少々の心付けや食事をもらう程度で協力する場合が多かった。

次に、60年代から90年代初頭までのK村における冠婚葬祭の形態の変遷について具体的に検討する。

III 得度式・結婚式・葬式の形態の変遷

1. 得度式・結婚式における儀式の簡略化

現在行われている得度式及び結婚式における儀式は、基本的に上述のような従前の形式を受け継いでいるが、いくつか異なる点も存する。そのひとつは、得度式におけるタム・クワン・ナーク儀礼や結婚式におけるセン・ピー儀礼などの、土着信仰に基づく儀礼が現在ではほとんど行われなくなっていることである。

K村の得度式においては、表3にあるように、60年代半ば以降タム・クワン・ナーク儀礼が行われる割合が次第に減ってきており、現在ではそのかわりに僧侶による説教という方式を採用する世帯が大半を占めている。村人の説明によれば、その大きな理由は、タム・クワン・ナーク儀礼は通常3～4時間もの長い時間を費やすうえに、バラモン師が少ない昨今では、それを採ること自体が難しいばかりかその料金も1,000-2,000バーツ以上と高額になるからである。さらに、バナナの葉で作られた生霊と神々の依代 (*bai si*) や、ゆで卵やココヤシの実などの儀礼に必要な小道具を用意したうえ、伴奏する楽隊をも別途調達しなければならない。そ

表3 得度式の形態の変遷

[単位：%]

年度	祝宴あり	タム・クワン儀礼あり	3日以上行う
-1964	88.9	100	37.5
1965-1974	82.4	85.7	28.6
1975-1984	87.5	28.6	9.5
1985-1994	83.3	13.3	0

注：「祝宴あり」における数値は全サンプル数に対する百分率、他の2つの項目では、祝宴ありの事例に対する百分率を表す。

11) 現在でも、祝宴ではなく午前中の儀式に招かれる僧侶や客人にだす料理はすべて手作りなので、こういう光景はいまでもしばしばみることができる。

表4 結婚式の形態の変遷

[単位：%]

年度	婚礼あり	セン・ピー儀礼あり	ファオ・ホーあり
-1964	68.4	92.3	84.6
1965-1974	33.3	83.3	100
1975-1984	58.3	0	57.1
1985-1994	96.4	0	7.4

注：1) 「婚礼あり」における数値は全サンプル数に対する百分率、他の2つの項目では、婚礼ありの事例に対する百分率を表す。

2) 全サンプル数のうち「婚礼あり」から除外されているものが「かけおち」した事例をあらわしている。

れにひきかえ僧侶による説教はほとんど何の準備も必要ないうえに30分ほどですみ、お布施を100 - 200バーツ程度と簡単な供物をわたすだけですむ。

結婚式におけるセン・ピー儀礼も同様に、僧侶による（夫婦生活の心得に関する）説教に完全におきかえられた（表4）。タム・クワン・ナーク儀礼と同じく、儀礼を執行する能力のある老人がほとんどいなくなってしまううえ、豚の頭・鶏・卵・酒・特別なお菓子などの供物の準備が大変だから、というのが村人の説明である。説教ならば、当日招請した僧侶にそのまま続けてやらせてもらえばよく、余分にお布施を払う必要もない。その説教すら省略する世帯も少なくない。このように現在の村人の大多数は、かかる煩雑な手間と費用をかけてまで生霊・精霊儀礼を行う必要性を、もはや感じていないのである。¹²⁾

また、寺の布薩堂においてとり行われる得度式の終了後、新たに誕生した僧らを主催者の自宅に招いて読経と布施を行う（*chalong phra*）が、これは以前は得度の翌日に行われることがあった。しかし、現在では式の全体に3日もかけると費用がかかりすぎるし面倒だという理由で、表3にあるとおり、3日にわたって式を行う人はない。また結婚式においては、現在では従前の祝宴と儀式的順序を逆転させ、朝に儀式をさきにすませて同じ日の夜に祝宴を行う形態が主流となり、前述のような新婦の若い友人達を中心とした式前夜のファオ・ホーという祝宴の形態を採用する世帯はほとんどない（表4）。その理由は、祝宴を婚礼当日に行う方が式の全体が一日ですんでしまい手間がかからないからである。ファオ・ホーの日の夜の宴会は若い友人たちを主体としたものであったが、現在のスタイルにおいては、両親の知人である大人たちも夜の祝宴に出席する。

以上のように得度式および結婚式の儀式におけるタム・クワン・ナーク儀礼とセン・ピー儀礼がそれぞれほとんど消失し、僧侶による説教が取って代わっている。その背景のひとつに

12) このように土着の精霊・生霊信仰に基づく儀礼が仏僧による説教に置き換えられていく過程は、村人の指摘する経済的な理由以外に、仏教イデオロギーの強化とも解釈できると同時に、都市化の影響もあると考えられる。例えば1960年代のバンコクでの得度式においては、タム・クワン・ナーク儀礼はすでに行われなくなっている [アヌマーン 1984: 208]。

は、煩雑な手続きを伴い、費用と時間のかかるこれらの儀礼は行いたくないという、経済的な論理がある。同時に、式全体に要する時間を短縮する傾向もある。¹³⁾ このように得度式・結婚式の儀式及び式全体においては、それが簡便で能率的なやり方、すなわち金銭的に安く、時間的にははやく済ませる形態に変化していく傾向が存するといえる。

2. 大規模な祝宴の浸透

従前の冠婚葬祭における饗宴において供される料理は、自前の材料を使った手作りのタイ料理であったことは上に述べた。食事の場所には、以前は主催者の家の中か高床の下があてられることが多かった。それがおそらく1960-70年代頃から、庭や広場に10人掛けの円形のテーブルをもちだして屋外で会食するようなスタイルが増えてきた。供される料理については、表5からわかるように1980年代から中華料理 (*to ciin*) の仕出し業者を雇う人が増え、現在ではオーダーメイドの中華料理が、伝統的な手作りのタイ料理 (*to thai*) にかわって祝宴における饗応の形態の主流となっている。これは当初は、町に住む裕福な中国系商人が行っていた祝宴のスタイルをまねたものと思われるが、現在では、こうした仕出し業者は農村部にさえ存在する。

中華料理の祝宴の典型的な光景とは、次のようなものである。昼間儀式が屋内で行われている間、外では雇われた業者等が手際よくテーブルを並べ、ステージや音響機器等を設営する。儀式が終了して祝宴の開始まではかなりの間があく。夕方暗くなりかけ、飾り付けた色とりどりの電球に明かりがともされる頃、招待客が、近隣の者は歩いて、遠くの者は車を使って、皆申し合わせたように同じ時刻にやってくる。入り口には受付があり、客は自分の名前が書かれた封筒に相応の額の祝儀をいれたものを手渡す。テーブルが一杯になった頃、ボーイが料理と酒を順番に給仕し始める。ステージでは型どおりの挨拶のあと、バンドによる流行歌の演奏が始まり、そこでは式の関係者や村長等がみずから歌うことも珍しくない。この間、主催者夫妻は各テーブルの客に挨拶をしてまわり、祝儀を受付で渡しそびれた客は、その時主催者に直接

表5 得度式・結婚式の祝宴における料理の種類
[単位：回数]

年度	タイ料理	中華料理	計
-1979	64	1	65
1980-1984	11	8	19
1985-1989	8	11	19
1990-1994	7	16	23

13) Terwiel [1994: 129] は、中西部のある農村において、以前は結婚式当日に午前と午後に分けて行われていた読経を、能率的に行うために午前に一本化した事例を描いている。

手渡す。料理は2時間ほどで尽きてしまい、その後客はそそくさと家路につく。

中華料理の祝宴は、業者に依頼するために自前のタイ料理よりも一般に高額となる。それにもかかわらず村民が中華料理を好む理由は、それが流行のスタイルであるという事情とともに、とくに客数が多い場合に能率よくサービスが行えるという点にある。手作りのタイ料理の場合は、自分たちで何もかも準備して、料理や酒がなくなったらまた買いに走らねばならない。それに比べて仕出しの中華料理の方は、料理の材料や酒類の購入、炊事、テーブルの設営から給仕にいたるまですべて業者に任せることができ、また客の追加注文には応じず料理が尽きたらパーティはそれで終了ということになる。費用は1テーブル（10人掛け）あたり400から600バーツの値段で、業者が何から何まで一括して請け負う形態をとるのが一般的だが、最近では、安くあげるために食材と酒・ジュース類だけは自分で購入し、あとの料理とテーブル設営と給仕を業者にまかせる、という方法をとる世帯もある。

中華料理の普及と並行して、祝宴に欠かせないもうひとつの要素である余興の形態も変化した。従前は村人みずから太鼓をもちだして歌い踊るか、せいぜい伝統音楽を演奏するアマチュアの小規模な楽団（*mohori* 等）を近隣から呼んだりする程度であった。ところが70年代半ば頃から、数人の歌手とギター・ベース・ドラム・キーボードなどの編成により主として流行の大衆歌謡を演奏する「チャドー（*chado*）」と呼ばれるプロのバンドを呼ぶことが多くなった（表6）。チャドーにかかる費用は、現時点では5,000-7,000バーツというのが標準的であるが、有名な楽団になると、10,000バーツもとるものがある。表6にあるように、80年代半ばからはチャドーの簡易版で「エレクトーン」と呼ばれるものも登場し、人気を集めている。これは通常なら数人のバンド編成でやるところを、エレクトーン一台で済ましてしまうので、1,500-2,000バーツと値段が安いからである。この他、ポピュラーな余興として・は移動式の映画（3,500-4,000バーツ）や、リケー（*like*）という農村歌劇（8,000-20,000バーツ）などがあるが、いずれも以前と比べてその費用がかさむようになった。

中華料理による祝宴への招待客数は、300人から500人というのが標準的な数だが、裕福な農家のなかには1,000人以上もの人々を招待する場合もある。招待客は、血縁関係にある親族および近隣に住む知人たちが主体である。そのほか、大きな祝宴に村長が招待されないことはなく、人によっては、県会議員・国会議員など、地元の名士を招待することもある。また村民の

表6 得度式・結婚式の祝宴における余興の種類

[単位：回数]

年度	チャドー	エレクトーン	映画	リケー
-1974	0	0	1	5
1975-1984	8	0	3	2
1985-1994	16	6	5	0

みならず、バンコクをはじめとする都市部で働く親戚知人や、儀式を受ける当人の若い友人たちも大勢参加する。同じ職場の友人たちがバスを1台借り切ってバンコクから駆けつけるというのは、しばしばみられる光景である。

じっさいには、このような大規模な祝宴の実施をすぐに一般化することはできない。すでに触れたように、各世帯の経済的な事情等によって、儀式は行っても祝宴は省略する場合がある。例えば表3で「祝宴あり」の項目から除外されているものはそうした宴会なしの得度式の事例であり、また、表4で「婚礼あり」の項目に含まれている結婚式的事例の中にも、夜の祝宴を省略して、朝の儀式の部分だけを簡潔に行った例がかなりある。しかし傾向として、以前は裕福な農家のみが行ったと思われる大きな饗宴を、今ではより多くの農民が行うようになっているといえる。それを表すのが、社会階層を越えた近年の中華料理の採用率の高さである。表7は1981年から91年に至る10年間にK村で行われた結婚式・得度式等における祝宴の形態を所得階層別にみたものであるが、これをみると、年収が平均を越えた中農を中心とする層にとくに中華料理を行う世帯が多いと同時に、最も貧しい階層においても3割以上の儀礼において中華料理が採用されていることがわかる。

さらに現在では、本来ならば午前中に僧侶を家にまねいて読経の後、食物と金品を寄進し、ささやかな饗応が行われる程度であった百日供養や新築祝いなどのタムブン儀礼においてさえ、以前はなかった大規模な饗宴が行われることがある。特に新築祝いにおいては、夜に祝宴とくに中華料理によるそれを行う世帯がしだいに増えてきている。たとえばサンプル農家のなかで、1985年から94年までの10年間に同儀礼を行った12世帯のうち半数は夜の祝宴を行っている。

表7 主催者の所得階層別にみる得度式・結婚式等における祝宴の形態
(1981-1991年)

[単位：%]

所得階層	推定年収 (バーツ)	中華料理	タイ料理	祝宴なし
第1階層	120,000-	70	10	20
第2階層	-120,000	76.9	15.4	7.7
第3階層	-80,000	81.3	18.8	0
第4階層	-60,000	50	33.3	16.7
第5階層	-40,000	41.9	45.2	12.9
第6階層	-20,000	32.3	41.9	25.8
計		54.3	31.2	14.5

注：1991年に行った全戸調査による。数値は、各階層において期間中に行われた得度式・結婚式等の総回数に対する百分率を表す。

3. 葬式の形態の変遷

中部タイ農村における葬式（火葬）¹⁴⁾は、従前から手の込んだ大規模な儀式がその家族の社会的地位や威信を表すとみなされており、新たに行われた葬式は常に過去の大きなそれと比較されていた [Kaufman 1960: 157-159]。また同時に、大規模な葬式は主催者と参集者に対し多くの功德をもたらすとも考えられている [Terwiel 1994: 235]。手の込んだ儀式は、例えば死後僧を招請して読経を行う日数の多寡、火葬当日に招請する僧侶の数、立派な棺や華美な飾りつけなどの諸側面にあらわれた [loc. cit.; Kaufman 1960: 158-161]。

現在のK村の葬式においては、一般に式全体の規模が大きくなり、出費が増えていく傾向がある。表8からは、死後遺体を安置し読経を行う日数や、火葬の日に招請する僧侶の数が増加する傾向がみとれ、これは同時に僧侶に対するお布施の額が増大することをも意味する。なお最近では火葬の当日に故人の年齢と同数の僧侶を招請する世帯も増えている。また、火葬の日や百日供養の際に映画やリケエなどの余興が呼ばれる機会も多くなってきた（表8）。また最近の傾向として表8からは、葬式の際に古典音楽を演奏する楽団ピパートモン (piphat mon) を雇ったり、寺や学校などに献金を行う世帯が増えていることがわかるが、これらはもともと王侯貴族や上流階級によって行われていた葬式の形態を真似たものと思われる。

上述のように葬式は主催者および参集者にとっての積徳行としても重要な意義をもっており、また葬式においては、参集者は招待されず自発的意志により参列する、主催者が通常複数世帯に及ぶなど、他の慶事儀礼と異なる点がいくつかある。したがってこれを得度式や結婚式などと単純に比較することはできないが、ここではただ、葬式の大規模化の傾向が一般にあり、それに要する費用が増大している、ということだけを確認しておきたい。

表8 葬式の形態の変遷

[単位：%]

年度	3夜以上安置	僧数30名以上	余興あり	楽団あり	献金あり
-1964	22.2	11.1	11.1	0	0
1965-1974	60	20	20	40	0
1975-1984	87.5	50	75	25	12.5
1985-1994	87.5	78.6	50	37.5	43.8

注：1) 数値はすべて全サンプル数に対する百分率を表す。

2) 「余興あり」には、葬式ではなく百日供養において行ったものを含む。

14) 従前の中部タイにおいては、家格相応の火葬を行うには費用調達のため一定の準備期間が必要等の理由から、死後茶毘に付すまで、1カ月から場合によっては数年の期間をおくことが多かった [Kaufman 1960: 157; Terwiel 1994: 235]。しかし60年代以降のK村においては、火葬まで長期の間隔をおくことは少なく、最低1晩から最大7晩の間遺体を安置したのち茶毘に付されるケースがほとんどである。

4. 冠婚葬祭に伴う主催者側の出費

つぎに冠婚葬祭を主催する際の出費の状況を、得度式の事例において時代別に比較してみよう。表9は、1973年から1991年にわたってK村で行われた比較的規模の大きな得度式の事例から4例をとりあげ、儀礼における支出の内容をみたものである。主催者は、いずれも稲作経営面積が平均をこえた上層農家である。

70年代と90年代の事例を比べて明らかなのは、支出総額の不明な料理への出費を除きどの項目においても2-3倍の増加がみられることである。また1991年の祝宴の事例では、中華料理と余興の費用すなわち祝宴に要する費用が支出総額の半分もしくはそれ以上を占めていることと同時に、たった一度の儀礼だけで、K村の年平均所得に匹敵する大金が支出されていることがわかる。また招待客の数は、1テーブルあたり10人と考えたらよいから、1991年の事例aでは約400人、1991年の事例bでは約750人というかなりの数である。

ここで各儀礼によせられた祝儀総額と支出総額との差額に注目すると、事例によってかなりの差異があることがわかる。例えば1979年の事例と1991年の事例bを比べてみると、前者はマイナスになっているのに対して、後者はかなりのプラスとなっている。後者がプラスとなっている理由は、客数が多かったことと同時に、その能率的な祝宴の遂行にある。この世帯主は副村長をしており顔の広い男で、中華料理の仕出し屋と友人関係にあった。1991年の事例aと比較すると明らかのように、1991年の事例bの中華料理に対する支出がテーブル数に比して極端に安いのは、そのコネを利用して業者から祝宴用のテーブルを安く貸してもらったうえに、料理の材料じたいは自分たちで用意したからである。つまり儀礼はその運営の仕方によって、祝儀額を上回る出費を強いられて「損をする」世帯もあれば、出費を抑えて「利益を得

表9 得度式における支出額とその内訳

[単位：パーツ]

内 訳	1973年の事例	1979年の事例	1991年の事例 a	1991年の事例 b
祝宴における料理(1)	タイ料理	タイ料理	中華・40テーブル	中華・75テーブル
(1)の費用	不明	不明	20,000	17,000
祝宴における余興(2)	友人の楽団	映画	チャドー	チャドー+映画
(2)の費用	0	3,500	6,000	6,500
僧侶へのお布施	275	1,050	3,400	2,350
出家者の僧衣代等	700	1,200	3,700	3,700
音響・照明代	350	400	900	900
写真・ビデオ代	0	1,000	3,000	2,000
支出総額(3)	8,000	40,000	40,000	50,000
祝儀総額(4)	10,000	30,000	43,000	94,000
差額(4)-(3)	+2,000	-10,000	+3,000	+44,000

注：数値はいずれも概数。なお、朝の儀式に供する食事に要した費用等正確な金額の判明しない項目を省略したため、金額の合計はここに挙げた各項目の総計とはなっていない。

る」世帯もあり、その収支には個人差が大きい。¹⁵⁾ そこには、他人に負けない派手な祝宴を行いたいという論理と、様々な工夫（食材を自ら購入する、エレクトーンの採用等）によりできるだけ安くあげたいという論理が交錯している。

以上のように主催者側にとっては、金銭的にみてもエネルギー的にみても、儀式ではなく祝宴の方により大きな力がそそがれるようになっている。前に触れたように、以前は儀式的な意味付けからは明瞭に切り離されてはいなかった祝宴が、場所じたいが儀式的な空間から切り離されたことに象徴されるように独立の領域として浮かび上がり、それ自体として（社会的地位の誇示などの）独自の意義があるものとして行われるようになってきていると考えられる。

それでは、かかる冠婚葬祭の形態の変化にともなって、それをめぐる祝儀・不祝儀のやりとりすなわち贈与交換の形態と意義は、どのように変わってきたのであろうか。

IV 冠婚葬祭をめぐる贈与交換の変遷

1. 贈与交換の基本システム

各世帯の冠婚葬祭の機会に招待された親戚や知人は、食事の準備や式の段取りを手伝うほか、なにがしかの金銭あるいは物を贈る慣例になっており、これは相互扶助の一種として意識されてきた。かかる機会に贈られる祝儀や不祝儀は、場面や人によって、アオレーン (*ao raeng*) やタムブン (*tham bun*) と呼ばれる。¹⁶⁾ アオレーンとは対等な関係にある者どうしの相互扶助を意味し、ここでは贈与とそれに伴う等価の返礼という一般的な贈与交換のことを指す。他方で積徳行としてのタムブンは、基本的に返礼を期待しない宗教的行為（喜捨）であり、理念的には等価の贈与交換の論理には拘束されないという含意がある。たとえば結婚式や得度式における祝儀は、以前は、アオレーンであると同時にタムブンの一種とも考えられていたことは、すでにみた。現在でも、一般に葬式における香典や、収入のない老人による少額の祝儀はタムブンとみなされる。これらタムブンの額は、一般に祝い事における通常の祝儀よりも少額となる。

祝儀や不祝儀のやりとりは、通常世帯を単位として行われる。貨幣や贈り物の交換の場合、そこではまず、対等な等価交換という基本原則がある。つまり以前に贈られた額にみあった、

15) 実際に村人は「損をした (*khat thun*)」「利益を得た (*dai kamrai*)」という経済的な用語を使用する。祝儀が余った場合は何に使うかと聞くと、貯金しておいて他家への贈与の返済に使う、と答える者が多い。また、葬式や得度式における祝儀・不祝儀の一部は寺に寄進される場合があるほか、結婚式における主催者（新婦の両親）への祝儀は、娘夫婦にそのまま贈られることがある。

16) アオレーンもしくはアオレーンカン (*ao raeng kan*) とは、直訳すれば「労働力を交換しあう」という意味を持ち、後述するようにもともと稲作作業等における世帯間の互助的労働交換を指す。それが転じて金銭的な相互扶助をも意味するようになったと考えられる。タムブンについては注6を参照。

あるいはそれ以上の返礼がなされねばならず、初期値にいくらか上乗せして返礼されるのが普通である。たとえば、まずある機会に A が B に対して100パーツ贈ったとしよう。次に A 家で儀礼があるとき、B は A に対して、初期値100パーツに対し30パーツ、50パーツなどの「利子 (*dok bia*)」¹⁷⁾ を加えて返さなければならない。なかには利子を返し忘れてたり、不当に少なくよこしたりしたケースもあるが、そういうことをした人はマナーのわるい人物とみなされる。そうならないために、儀礼の主催者は多くの場合、誰某からいくら受け取ったという記録を祝儀帳や不祝儀帳に克明に記し、後々相手方で儀礼が行われる際に参照するために保存しておく。

上の例は100→150というものである。50という利子をつけて返すことによって、いわば B は借金を清算したのである (図3, パターン1)。ところで、図3のパターン2にあるように、もし今後 B 家で再び儀礼を行う予定があるとき、第2局面において B は A に対して200パーツ支払う場合がある。ここで初期値100パーツに上乗せされた100パーツは、利子とはみなされず、今度は逆に A が B に対して100パーツ借りができることになる。こうなると、将来もう一度 B 家の儀礼に招待されたとき、A は出席しないわけにはいかないのである。これを村人は「(相手との関係を) 結んでおく (*phuk wai*)」と表現する。逆にパターン1のように30や50パーツなどの100パーツ以下の利子をつけて返すという行為は、贈与を受け取る側 (A 家) から、相手方の家 (B 家) では今後儀礼を行う予定がないから貸借関係はここでいったん打ち切りましょう、という合図であるとみなされる場合がある。

	パターン1	パターン2
第1局面	A → B 100	A → B 100
第2局面	A ← B 120 150	A ← B 200
第3局面		A → B 150 200

図3 祝儀のやりとりの基本パターン

17) 利子をつける行為に対する村人の説明の論理には二通りある。同額を返すのは失礼であり、なにがしかの「気持ち」をつけて返すべき、という論理と、返礼までの時間差に伴うインフレ分を考慮すべき、という論理である。なお、贈り物の場合も「利子をつけて返す」原則は厳密にまもられていた。たとえば、コップ2つに対して同じ型のコップを3つ、直径20cmの鍋に対して直径30cmの鍋という具合である。

2. 祝儀・不祝儀の額の増大と標準化

70年代初期には、得度式や結婚式における祝儀の額は、10～20パーツ程度が標準的な額であった。それが、80年代を通して標準的な数値は100パーツにまで上昇し、同時に同額への集中化がおこった。表10をみると、1973年や1979年の事例では、全体に額が少なく、非常にばらつきが多いが、91年現在では100パーツ¹⁸⁾への標準化が顕著であることが明瞭にみてとれる。これは後にみるように物価の上昇分を上回る増大ぶりである。

表10 得度式に客がもちよる祝儀の額とその人数

[単位：人，パーツ]

金額 (パーツ)	1973年の事例	1979年の事例	1991年の事例 a	1991年の事例 b
-10	130	22 (10)		
-30	101	158 (44)	47 (18)	28 (4)
-99	21	120 (3)		
100	6	63 (0)	236 (23)	238 (25)
-200	1	46 (0)	74 (2)	106 (14)
-500	0	9 (0)	12 (1)	23 (2)
500-	0	0	0	5 (1)
贈り物	多数	38 (38)	1 (1)	0
計	259	456 (95)	370 (45)	400 (46)
金額合計	5,060	26,680	43,010	56,510
一人当平均額	19.5	63.8 (21.4)	116.2 (93.0)	141.3 (141.7)

注：1) 4つの事例は表9に同じ。

2) ()内の数値は僧志願者の友人の人数とその祝儀の額を表す。

3) ここでは祝儀帳に記載されているもののみを取りあげたので、人数と金額の合計は実際の総客数及び祝儀総額を表している訳ではない。

かかる金額の上昇と標準化は、中華料理による祝宴の普及と大いに関連があると思われる。例えば村民の間では、祝宴に持参する祝儀額はタイ料理の祝宴であれば50パーツ程度でもかまわないが、中華料理の場合なら、最低でも100パーツというのが常識となっている。客は事前に配布される招待状を見て、料理の種類を判断するのである。また、このように理念上はタイ料理の祝宴への祝儀額は50パーツでもよいとされているとはいえ、じっさいに1994年に行われたタイ料理による祝宴の事例をみると、100パーツないしはそれ以上を持参した客が圧倒的に多く、中華料理の祝宴における祝儀帳と区別がつかなくなっている (表11)。また単に金額が

表11 タイ料理の祝宴を伴った新築祝いにおける祝儀額の分布 (1994年)

金額 (パーツ)	客数 (%)
-99	26 (15.1)
100	109 (63.4)
-200	32 (18.6)
200-	5 (2.9)

18) これは当時のK村近辺において、日雇いの農業労働 (サトウキビ刈りなど) において得られる日給にほぼ等しい。

100パーツに標準化するだけでなく、詳しくみると次のような諸現象が起こっている。

得度式においては、主催者である両親のみならず、僧志願者である息子も同世代の友人たちを少数ながら自分の名義で招待する。20歳前後のこの友人たちのもちよる祝儀の額は、以前は少額であり、贈り物（コップや皿や石けんなどの日用品）である場合も多かった。しかし表10からもわかる通り、現在では贈り物のやりとりはほぼ消滅している。そのうえ年少の友人たちも中華料理の祝宴の方に出席するようになり、¹⁹⁾ 大人と同額の100パーツを支払わねばならないようになった。このように、以前は明確であった贈与交換の場における年少の友人と大人の区別が、現在では事実上ほぼ消失している。

結婚式における祝儀は、前に触れたように、従来 (1) 大人から新郎新婦への祝儀（ラブ・ワイ）、(2) 新郎新婦の若い友人たちからの贈り物や金銭、(3) 大人から花嫁の両親への祝儀（タムブン）、という3者からなりたち、表12にある通り各々の祝儀総額は1980年代半ばほどまでは均衡していた。しかし前述のように夜の祝宴が新郎新婦の友人たちによるファオ・ホーという形態から、大人たちをまきこむ中華料理の祝宴へと変貌するにつれて、得度式と同様に若い友人たちが贈り物をもちよる習慣は消え去り、それと同時に以前は朝の儀式の時に手渡されていた大人によるタムブンが、夜の祝宴に持参する祝儀に移行した。その結果、夜の祝宴においてよせられる (2) と (3) の祝儀の金額が、朝の儀式における (1) を大きく凌駕するようになった（表12）。

ここまで述べてきた贈与交換の基本システムは、基本的に（多くは正式の招待状を受け取ったうえで）招待されて出席する得度式や結婚式を中心とした祝い事におけるものである。葬式の場合は招待がなく、個々人がみずからの意志によって参列し、前述のようにそこで渡される香典はアオレーン（相互扶助）というよりも、タムブン（積徳行）、つまり金銭的な見返りを期待しない喜捨と意識される傾向が本来つよく、その金額も祝儀に比べて少額であった。しかし、前述のような葬式や百日供養の遂行に要する費用の増大にともない、近年の不祝儀の額も

表 12 結婚式における祝儀総額の内訳

[単位：パーツ]

	1974年の事例	1981年の事例	1984年の事例	1991年の事例
祝宴の形態	ファオ・ホー	ファオ・ホー	ファオ・ホー＋中華	中華料理
ラブ・ワイ	2,980	3,050	9,000	15,000
友人から新婦へ	2,400	3,525	10,000	60,000
両親へのタムブン	2,560	3,000	10,000	

注：1974年及び1981年の事例での友人から新婦への贈与のなかには多数の贈り物が含まれていたが、ここでは省略した。

19) 中華料理による祝宴が導入され始めた1980年前後の得度式・結婚式においては、大人は屋外で中華料理の祝宴、年少の友人は屋内でタイ料理の祝宴、という過渡的な形態がみられた。

上昇し、同時にそれを祝儀のやりとりのシステムに組み込んで考える人が増えている。つまりもともと少額でよいとされ、見返りを期待しない喜捨と考えられていた不祝儀まで、50～100パーツの支出とその返礼は常識というふうに考える人が多くなりつつあるのである。²⁰⁾ また一般に老人が祝い事や法事などの儀式の場において主催者に贈る10～20パーツの少額のタムブンも、じっさいに受け取った方は記帳し、後日返済の機会があれば、きちんと利子をつけて返済することがある。お互いに文字どおりタムブンのつもりであれば、等価交換について慎重に考慮する必要はないはずである。しかし現実には、立派なタムブンの行為として認められている不祝儀においてすら、その言葉とは裏腹に、祝宴における祝儀と同様にアオレーンとしてやりとりが展開され、相応の「利子」までつける厳しいルールが貫徹されることが多い。

以上のように贈与の論理としてタムブンという表現がなされる局面がいまだに多いものの、現実には表10、表11などの祝儀帳の記録が如実に示すように、特別に親しい人以外の儀礼への祝儀・不祝儀は一律に100パーツ、というような明快なルールにのっとなって行動する人が大半をしめている。このように、1980年代以降10年ほどのあいだに、主要な冠婚葬祭における贈与交換は「中華料理の祝宴＝100パーツの贈与」というシステムに多かれ少なかれ巻き込まれてしまったということができる。

3. 祝儀・不祝儀への出費が家計に対してもつ重み

ここである中堅稲作農家が1981年の結婚以来1994年にいたるまで、他家のどのような儀礼にどれくらい出席したかを、その家の祝儀帳の記録によってみてみよう。ノートに記載されている総回数は242回であり、うち得度式が45%、結婚式が28%、新築祝いが15%の割合となっている。そのうち日付のはっきりしている1990年9月から91年8月までの一年間だけをとってみると、出席回数は55回となる。平均すると1週間に1回以上出席している勘定になるが、そのうち5分の3がとくに儀礼の多い1月から4月の間に集中し、この期間は週に2～3回というハイペースである。

つぎに同じ農家が1990年9月～1991年8月の1年間に支出した祝儀・不祝儀の額をみてみよう。表13をみると、中華料理の祝宴における祝儀の相場である100パーツという金額が圧倒的に多く、平均すると1回あたり139パーツを支出している。ここで、同期間の支出総額は7,510パーツである。この農家は推定所得約84,000パーツ（1991年）であるから、1年間でこの農家は所得の1割近くをこのために出費している計算になる。

ここで表10における1979年と1991年の各事例における祝儀の平均額を比較してみると、後者

20) 例えば、1994年に村内で行われた有力者（村の草分けN翁の娘）の大規模な葬式（火葬）においては、100パーツを持参した者が全体の41.5%、50パーツを持参したものが24.2%をしめ、全体の平均額は102パーツにも及んでいる。

表 13 ある農家が他家の儀礼へ支出した祝儀・不祝儀額の分布 (1990年9月-1991年8月)

金額 (パーツ)	回数
-99	0
100	40
-200	10
201-	4
計	54
総額 (パーツ)	7,510
一回当平均額	139.1

は前者の2倍前後となっている。したがって1年間に他家に招待される回数がさほど変わっていないと仮定するならば、91年現在では各農家は他家の儀礼への贈与において、10年前の少なくとも2倍の出費を強いられていると推定される。ここで、この間の物価指数と農家所得の変動をみると、1991年の消費者物価指数は79年の約1.9倍となっている一方で、91/92作物年における中部タイの平均農家所得は、80/81年のそれに比較して約1.66倍の伸びにとどまっている。²¹⁾ したがって、かかる出費の倍増という伸び方は、K村の農家の家計にとって決して小さくはない変化である。中華料理による祝宴の浸透が進行したこの10年間だけをとってみても、各世帯の祝儀・不祝儀への出費が家計に対してかなり大きな負担となるようになってきたことは明らかである。

V 考察——貨幣交換で結ばれる社会関係の力学

1. 貨幣を媒介とした贈与の等価交換システムの形成

ここまで主として得度式と結婚式を中心として、60年代以降の冠婚葬祭の遂行における貨幣使用の卓越化とともに、儀式が簡略化されると同時に祝宴部分が独立の領域として浮上し、大規模なそれがある程度社会階層の差を越えて浸透していく様子を検討してきた。そういう変化をもっともよく象徴する80年代以降の中華料理の普及にともなって、一般的な祝儀の額が100パーツへと標準化し、比較的明快な規則(100パーツという基準の生成や、利子の付与など)を有する贈与の等価交換のシステムが形成された。また、交換の規則が明快で厳密なものになるにつれて、それまであいまいであった交換の諸形態(贈り物のやりとりや、タムブンなど特別の宗教的意義付けがなされる贈与)が、「貨幣によるアオレーン(相互扶助)」という同一の規則のもとに包摂されつつある。これは、高価な中華料理の普及にともなって「もてなしに見合った贈与の額」という意識が浸透し、それが本来贈与が有していた他の人格的・宗教的側面を凌駕しつつある傾向を反映しているのだと考えられる。さらに、各世帯の他家への祝儀・不祝儀の出費は、所得の増加を上回る勢いで上昇していることを確認した。

このような贈与交換システムの標準化とエスカレートはなぜ起こったのだろうか。その基礎的条件として、ひとつには、それが(1)明確な価値尺度であり、(2)簡便な流通手段である

21) 以上の数値はNSO [1984: 418; 1990: 313-314; 1992: 341-342] 及びOAE [1983: 258-267; 1995: 230] より算出した。

貨幣を媒介としていたことがあげられる。しかしながら、かかる交換手段としての貨幣の基礎的性質が、現実の中部タイ農村における何か固有の文化的な原理あるいは社会学的な力と連携するものでなければ、このようなシステムの形成・発展はありえなかったと思われる。そこで次に、現時点における貨幣を徹底的に使用した儀礼の遂行と贈与交換のシステムが、実際の村民の社会関係におけるどのような力学により維持され、あるいはエスカレートしていくのかという点について、随時過去の状況と比較しながら具体的に検討したい。

2. 互酬性の論理

タイ農村における世帯間の社会関係構築の原理として、人間関係の対等化を目指す互酬性の規範が大きく作用してきたことは、友杉 [1977: 88-89; Tomosugi 1980: 86, 125] や Tambiah [1968: 117] 等により指摘されている。それは具体的には稲作作業などの生産行為における双務的労働交換や、消費生活、ことに様々な儀礼的な場面における世帯間の相互扶助という形で顕在化する。それは通常、労働力あるいは財の理念上対等な等価の交換を目指すものであり、この対等化の論理は現在の冠婚葬祭をめぐる相互扶助においても基本的に変わりがなく、儀礼の場における手伝いや贈与のやりとりを原理的な意味で支えている。

しかし現実には、各村民や村外から儀礼に参加する人々どうしのあいだには、経済状態、社会的地位、儀礼に対する趣向などにおいて様々な条件的差異が存在する。したがって、かかる相互扶助における対等化の論理を実際に適用するにあたっては、ある程度の柔軟性が存しなければならない。たとえば従前のK村においては、祝儀の額が各々の家庭の事情や考え方によってかなり融通がきいただけでなく、現金のない者は祝儀を贈るかわりに、式の段取りや食事づくりを手伝うことさえ許されていた。

しかし、本稿で述べてきたような、例外をあまり認めないような統一的な贈与交換システムの形成は、この互酬性の規範を実践面において融通のきかないものにしていていると思われる。というのは、それは流行の儀礼スタイルに追随するというような意識的なレベルのみならず、次にみるように、物質的なレベルにおける強制力をもっているからである。従前のK村では、上述のように、各世帯のおかれた境遇や独自の判断等に応じて、贈与交換のシステムへの巻き込まれの度合いにある程度の柔軟性・弾力性が存した。それに反して現在では、誰もが一律に100パーツ以上を贈るのが常識というような規範ができつつあり、かつ前述のように自家の儀礼への贈与を相手に対して半ば強制するような工夫（「結んでおく *phuk wai*」など）がなされることも多いため、かかるシステムの外へ逃れ出ることが困難となっているのである。

このような統一的な規則にしたがって高額の祝儀・不祝儀を他家にატえ続けることは、貧しい家庭や今後自家で儀礼を行う予定のない世帯にとって、単に家計の負担となるばかりではない。それどころか、これらの世帯は贈与として他家に与えた分を取り戻して清算するため

に、本人の意志に関わらず他家と同程度の規模の中華料理の祝宴をひらかざるをえない状況に追い込まれる。つまり一定額の祝儀を他家に与え続けることは、行いかどうかもわからない未来の儀礼に対して、なかば強制的に投資させられているのと同じことになる。

子供の多い世帯は頻繁に儀礼を主催し、「貸した金」の返還の機会を得ることができるが、子供のない家庭はそういう訳にはいかない。しかし儀礼を行う機会に恵まれない世帯も、贈与した金額がある程度に達すれば、その清算のために何とか理由をつけて儀礼を行わざるをえない。そこで近年では、この先儀礼を行う機会のない家族が、特別な理由なしに「親睦会 (*phoppasangsán*)」と称する祝宴を行うようになった。²²⁾ この「親睦会」や、本来ならば大規模な祝宴を要しないはずの新築祝いやその他のタムブン儀礼等の機会において、近年しばしば中華料理の祝宴が行われるようになったのは、明らかに儀礼を行う機会の少ない世帯が「他家に与えた贈与の清算」を目的に行う設宴である。

このように統一的な贈与交換システムの形成によって、従前から存在した互酬性の規範に基づく対等化の論理は、儀礼をめぐる村民の実践的行動のなかでより強く作用するようになっており、それは単に同システムの維持に貢献しているだけでなく、次々に人々をシステムの内部へと否応なしに巻き込んでいくことによって、システム全体の規模をエスカレートさせる力としても働いていると考えられる。

3. 自己顕示の論理

中部タイ農村の冠婚葬祭が、とくに裕福な農家の場合や好況時において、従前からともすると浪費的あるいは自己顕示的傾向に走りがちであったことは、すでに指摘されている [Sharp and Hanks 1978: 138, 224-225]。この自己顕示の論理は、一見すると上記の対等化を目指す互酬性の論理とは矛盾するようにみえるが、どちらも村社会というステージを前提としており、いわば共同体の内側を向いた論理であるという点で共通している。冠婚葬祭を主催する側からみると、他人に負けない派手な儀礼を行いたいという自己顕示的な論理が、全体として中華料理を中心とする派手な祝宴の浸透を促進していることは明らかである。

自己顕示の論理は、贈与交換の局面においても顕在化している。たとえば現在では一般に、自分の兄弟や甥・姪などのごく近い親族や、あるいは特別に親しい人の主催する儀礼においては、標準額の2倍の200バーツもしくはそれ以上の金額を贈与する傾向がある。かかる200 - 300バーツという高額な祝儀に対する返礼には、少額では失礼であるという理由から100バーツという高い利子がつけられる事が多い。また、気前のよさを誇示したい人や、少額で失礼になることをおそれる人は、葬式などの法事の場合にすら必要以上に不祝儀の金額を奮発す

22) 他のタムブン儀礼と同様、午前中僧を招請してタムブンをを行い、夜に設宴する。この「親睦会」がどのような経緯で、正確にいつごろから始まったかは不明である。

ることになる。ここにみられる自己顕示的な論理は結果として、全体に贈与の金額をエスカレートさせることにもつながっていると考えられる。

4. 経済の論理

従前のK村においては、「今度のうちの儀礼では100パーツのアオレーンをお願いします。次の機会には必ず返すから」などと各戸に言って回って、儀礼に必要な額を確保する人もあった。つまり現金収入の機会がまだ少なかった当時の冠婚葬祭は、集まった祝儀・不祝儀をギリギリまで使って運営されており、贈与には相手の儀礼運営を助けるという実質的な意義（アオレーン＝相互扶助）があった。しかし現在では、以下にみるように儀礼運営における「利益」を積極的にもとめる経済的な傾向がしだいに強まっており、アオレーンとすら呼ぶことができないような状況ができつつある。

まず主催者側の立場からみると、すでに触れたように、儀礼における出費を抑えることにより「利益」を求める傾向がある。例えば多数の客を招待し多額の祝儀を得ておきながら、祝宴における中華料理の材料購入を自ら行ったり、余興に安上がりなエレクトーンを使ったりして出費を抑えるような行為がそれである。また、儀式における煩雑な諸儀礼の簡略化の傾向の背後にも、同様の論理が働いていることをみた。これらは、利潤の最大化を図る経済合理的な論理に基づく行為という側面をもっているといえよう。

このように事前に収支を計算し利益を得たりすることが可能なのは、貨幣による贈与交換のシステムにおいては一時に大量の現金を集めることができ、また表10においてすでに検討したように、いまでは招待客のほとんどが100パーツもしくはそれ以上の額を持参するため、客数から祝儀総額を予測することが比較的簡単にできるからである。祝儀の額がバラバラであったり、贈り物が多く贈られていた時代には、かかる事前の計算と予測は不可能であった。²³⁾

次に問題を贈与交換の局面において考えてみよう。現在行われる比較的大きな儀礼においては、1,000～2,000パーツという大金の祝儀が渡されることも珍しくない。これには二つの場合がある。ひとつはごく近い血縁の者あるいは親しい友人が、その親愛の情を示して気前よく与える場合である。もうひとつは、それほど親しくなくても、近いうちに自家の儀礼を控えてい

23) Janlekha [1955: 330] がバンコク近郊農村で行った経済調査によれば、1948年から53年に至る5年間にサンプル農家が主催した36回の儀礼における純支出額（支出総額から祝儀総額を差し引いたもの）の平均は4,361パーツで、「支出超過」は最大15,000パーツにまで及ぶ一方で「純収益」の最高額は10パーツにすぎない。このように当時は、出費と祝儀の差額によって「利益を得る」ような事態は非常に少なかったのではないかと考えられる。なお、葬式の場合は現在でも、参列者の数も個々の香典の額もともに不確定要素が大きいのが特徴である。そのため、従前から農協など取引金融機関における生命保険に加入している世帯がある他、K村では94年から一部世帯による葬式講が結成されており、メンバーである各戸に葬式ごとの一定額（100パーツ）の支払いを義務づけ、必要額の安定的確保を図っている。

る場合である。というのは、当事者である村人の説明によれば、ここで1,000パーツを貸し付けておけば、この大金に対して10や20パーツの少額の利子をつけるような失礼な人はないだろうという予測のもとに、次に相手が返済してくる際に最低でも100、最高1,000の「利子」が期待できるからである。これは互助的規範に基づく行動というよりも明らかに経済合理的な論理に基づく行為であり、上記の自己顕示的な贈与と同様に、祝儀・不祝儀の金額の全般的な上昇を促進していると思われる。

VI 結 論

本稿では、中部タイの先進的稲作村 K 村における冠婚葬祭とそれをめぐる贈与交換の変容過程を、主として稲作近代化の始まる1960年代以降について検討してきた。以上のように比較的短期的なスパン（60-80年代）について検討しただけでも、大きな変化をみてとることができた。そこではまず、祝い事における大規模な祝宴や自己顕示的な葬式がある程度階層的格差を越えて浸透すると同時に、それに要する費用が増大する傾向があった。かかる変化と並行して、本来あいまいさを許容しうるはずの互酬性の規範にもとづき、またタムブン（積徳行）等の宗教的意味あいを兼ね備える局面も多かった世帯間の贈与交換においては、祝儀・不祝儀の金額が全般的に上昇し標準化すると同時に、媒体として貨幣の使用が徹底することによって交換上の等価関係が明確化し、比較的厳密な規則を持つ貨幣交換のシステムが支配的となった。

かかる「費用のかかる派手な儀礼と高額な贈与」という組み合わせのシステムの広範な浸透は、第一義的には、地域住民（村民）とその外延的集団（都市に住む親族・友人）の織りなす社会集団全般における経済成長を前提としている。しかしより詳細に検討するならば、それは単に貨幣経済の浸透のみによるものではなく、その貨幣の基礎的な性質が、中部タイ農村における冠婚葬祭にかかわる既存の社会慣習上の諸傾向と結びついて引き起こされた事態であった。

その既存の諸傾向のひとつには、一見して明らかなものとして、個々の世帯の自己顕示的な心的態度がある。だが、かかる事態を引き起こした重要な内在的原因としてむしろ本稿で注目してきたのは、タイ農村の社会関係を特徴づけてきた世帯間の互酬性の規範である。すでに触れたように、中部タイ農村においては、互酬性の規範に基づいた世帯間の相互扶助が、それが稲作生産における共同作業であると冠婚葬祭における贈与交換であるとを問わず、アオレーン（労働力交換）という同じ用語であらわされる。また「我々が彼に借りがある（*rao tit khao*）」や「彼に借りを返す（*chai raeng khao*）」などの、もともとは労働交換において使われていたと思われる用語が、貨幣を使った贈与交換においても転用されている。つまり生産と儀礼をめぐる互酬的相互扶助は、それが実際に労力の提供をとまなうものであれ金銭のみによるものであ

れ、どちらも村民にとって同じ社会関係上のカテゴリーとして認識されてきたのだと考えられる。

ところで、これまで多くの論者が、タイ農村における生産活動ことに稲作生産における相互扶助の社会的重要性と、貨幣経済の浸透にともなうその崩壊について語っており [友杉 1977: 88-92; Sharp and Hanks 1978: 136-137; 北原 1987: 351, 494-497], K村においても同様な事情がある。ところがその一方で、冠婚葬祭をめぐる世帯間の相互扶助の方は、ここまで論じてきたように、いまだ盛んに行われている。むしろ友杉 [1977: 93] が指摘するように、生産における共同関係が希薄化している現在では、世帯間のアオレーンを持続的な形で実践できるのは、かかる儀礼的な機会においてしかないというべきである。しかし冠婚葬祭をめぐる相互扶助的關係をはじめとする社会関係のあり方は、現在では、以下に再確認するように従前とは違った形態において展開している。

祝宴の準備や余興を第三者の業者まかせにし、オーダーメイドの中華料理が供されることの多い現在では、従前のような式の準備をめぐる相互扶助的關係が薄れているだけではない。ここでは、招待客へのもてなしの性質がこまやかな気遣いから能率的で画一的なサービスへとおきかわっており、以前の夜を徹した共食共飲にみられたような濃厚な人格的交流は、2-3時間程度の時間的に限定された形式的な設宴においては望むべくもない。祝宴以外の儀式部分についても、時間的に素早く能率的に、金銭的に安くすませようという経済合理的なやり方が選択されるようになってきていることを確認した。また、余興における楽団や精霊・生霊儀礼の執行者などに関して、村内や近隣村の知人等がほとんど無報酬で「手伝いにくる」ような慣行は、現在ではほとんどみられなくなった。

このように、貨幣を媒介とした関係が社会関係の諸側面に深く浸透している現在では、儀礼の遂行に関わる人格的な相互扶助関係およびそれ以外の面での参集者間のコミュニケーションは、従前に比べてかなり希薄化しつつあるとあってよい。したがって、冠婚葬祭の機会をめぐる、村外の者を含む世帯間の互助的關係を持続的な形式において再生産していくのは、現在では貨幣を媒体とする贈与交換以外にないのである。以上のような変化は、村落内部の人間関係のみならず、以下にみるように村民の社会関係の地理的・物理的な外部への拡大とも密接な関連をもっていると思われる。

すでに触れたように、K村の創始者である故N翁の子孫は村内で最大の親族集団を形成している。ところが一方で図2からわかるように、そのK村で生まれた子孫の大多数は現在ではバンコクや地方都市に住み給与取得者となっており、さらにまた各々が行く先々で新たに家族を形成し続けている。このように日々増大しつつあるバンコクや他の都市に住む親戚縁者とK村の住民がつきあいを維持していくのに、貨幣は便利な道具である。バンコクに住むK村出身者が、村で儀礼があるからといってそのたびに手伝いに行くわけにはいかないが、直接手

伝わなくても、あるいはたとえ出席しなくても、祝儀だけを誰か他の人に託すことによって期待された義務を果たすことが可能になる。このように貨幣は地域的に広がりをもった親族・知人とのつきあいを維持していくことを可能にしている。²⁴⁾

また、現在では、近隣村のそれほど親しくもない間柄の人から祝宴に招待されることも珍しくない。それはおそらく、祝儀・不祝儀のやりとりを単なる形式的な借金関係とわりきる人が増えていることを意味しているのだと思われる。つまりそれじたい非人格的な形式という側面をも有する貨幣による贈与交換は、深い人格的なコミットをとまなわない形での関係の創出と維持を容易にし、またかかる関係の外への拡張をも促進する。このような贈与交換における人格性の希薄化の傾向は、すでに論じたように、交換の規則に則りつつ儀礼の運営において利益を求めようとする純粋に経済的な論理を發揮する余地をも拡大していると考えられる。

以上のような、明快な規則を有する貨幣の等価交換システムの形成とエスカレートは、一方で内へむけた農村的（および親族的）共同性が高く、他方で外への開放性をも兼ね備えているという、商業的稲作村としてのK村の住民が現実におかれている社会関係の有り様を反映しているのだと思われる。そこに浮かびあがってくるのは、一方で生活の様々な側面における外部社会とのネットワークを拡大していきながら、他方で新たな形で再生した世帯間の互助的規範にも強く束縛されている村民の姿である。つまり、かかる規格化された贈与交換のシステムは、一方で外部に対しては人間関係の拡大とその維持を容易にしながら、他方で内部に対しては、あたかも個人の意志や人格を越えた柔軟性がなく統制のきかない自律的過程であるかのようであらわれており、各個人に対して非人格的な形で強制力を及ぼしているのである。

生活の諸側面において貨幣の使用がまだそれほど卓越化していなかった時代には、儀礼の遂行や贈与交換のシステムに未だかなりの柔軟性があった。1940～50年代にバンコク近郊の稲作村を調査したシャープとハンクスによれば [Sharp and Hanks 1978: 224]、1930年の世界恐慌によって手もちの現金がなくなった農民たちは、それまで支配的であった雇用労働にかかわって稲作作業における相互扶助を復活させ、また、富の顕示としての通過儀礼は一時的に減退している。つまり当時の農民の生産活動と消費生活は、外部からの貨幣の供給量に対し、即座に対応できるほどの弾力性をまだもちあわせていた、と考えられる。

しかし現在のK村のように、いったん貨幣を媒介とした強固な贈与交換のシステムが支配的となった以上、たとえ米価がいかに低迷しようと、そのシステムを任意にやめたり、統制し

24) 最近では、都市の通勤者のことを考慮して、慶弔にかかわらず式を土日にあわせて行う家庭が増えている。また近年の結婚式においては、朝の儀式の部分は両親の裁量にまかせるが、夜の祝宴の部分は自分で主催する若夫婦が増えている。つまり、村をはなれた都会の学校や職場において新たな人間関係をつくった娘が、両親の知人を上回る多数の友人を自分の名義で招待して、みずから祝宴の主人公となる、というわけである。人によっては、朝の儀式は村ですませるが、夜の祝宴は友人の多いバンコクで行うことさえある。

たりすることは難しい。テレビや冷蔵庫は買わない、と決意することができるが、儉約を理由にして、隣人の主催する祝宴を欠席することはできないからである。一回ごとの祝儀の額や招待される回数が増えれば、本人の意志にかかわらず全体の出費は増えていく。出費した分は、取り返されなければならない。そこで、無理に口実を作っても自ら盛大な祝宴を催し、多数の客を招待する。こうして同じことが繰り返され、全体として規模と範囲がエスカレートしてゆく。

本稿においては、主として貨幣という抽象的形式によって結ばれる社会関係に焦点をあてて分析を行ってきたが、かかる儀礼の形態の変化と贈与交換システムのエスカレートが起こった背景の一端は示すことができたのではないかと思う。かかる変化の全体は、本来ならば儀礼とそれをめぐる各種の互酬的關係²⁵⁾に対する宗教的意味付けの変化や、経済発展や都市化のもたらす文化的影響²⁶⁾といった面からも細かく検討する必要があると思われるが、それについては今後の課題としておきたい。

謝 辞

祖田修教授をはじめとする京都大学農学原論研究室のゼミのメンバーの方々には、ゼミ発表の場で数々の有益なコメントを頂いた。また北原淳教授（神戸大学）と渡辺敦氏には、草稿をていねいに読んでいただいたうえで貴重な御教示を賜った。以上の諸氏ならびに、現地での調査に協力して下さったK村の人々に対し、ここに記して心からの謝意を表したい。

引用文献

- Anuman Rajadhon, Phraya. 1958. *Prapheni Rueang Taeng Ngan Baosao Khong Thai* (タイの結婚慣習). Bangkok: National Cultural Committee, Ministry of Education.
- アヌマーン・ラーチャトン, プラヤー. 1984. 『タイ民衆生活誌(2)』 森幹男(編訳). 東京: 井村文化事業社.
- Janlekha, K. O. 1955. A Study of the Economy of a Rice Growing Village in Central Thailand. Ph.D. Thesis, Cornell University.
- Kaufman, H. K. 1960. *Bangkhuaad: A Community Study in Thailand*. New York: J. J. Augustin Publisher.
- 北原 淳. 1985. 『開発と農業——東南アジアの資本主義化』 京都: 世界思想社.
- . (編). 1987. 『タイ農村の構造と変動』 東京: 勁草書房.
- National Statistical Office (NSO). 1984. *Statistical Yearbook Thailand 1981-1984*. Bangkok.
- . 1990. *Statistical Yearbook Thailand 1990*. Bangkok.
- . 1992. *Statistical Yearbook Thailand 1992*. Bangkok.
- Office of Agricultural Economics (OAE). 1983. *Agricultural Statistics of Thailand Crop Year 1982/83*. Bangkok: Ministry of Agriculture and Co-operatives.

25) たとえば Tambiah [1968] は、タイ農村の重要な社会的規範としての儀礼の場における互酬性を、本稿でとりあげてきたような世帯間における目にみえる形態での互助的關係のみならず、宗教的觀念の領域における世代間の、あるいは平信徒と僧の間の相互依存的關係という視点からも考察している。

26) 本稿のあちこちで示唆してきたように、流行の祝宴・儀式の形態のほとんどが、都市部の中国系住民や上流階級の奢侈的なスタイルに由来している。

- . 1995. *Agricultural Statistics of Thailand Crop Year 1994/95*. Bangkok: Ministry of Agriculture and Co-operatives.
- 小野沢正喜. 1983. 「タイにおけるタム・クワン儀礼」『儀礼と象徴——文化人類学的考察』吉田禎吾教授還暦記念論文集, 299-324ページ所収. 福岡：九州大学出版会.
- Prawet Phonlasen. 1989. *Naew Thang Phathana Kan Kaset Tambon Thung Khli* (Thung Khli 区農業開発の方針). Samnak Ngan Kaset Amphoe Doembangnangbuat (Doembangnangbuat 郡農務局).
- Sharp, L.; and Hanks, L. M. 1978. *Bang Chan: Social History of Rural Community in Thailand*. Cornell University Press.
- Tambiah, S. J. 1968. The Ideology of Merit and the Social Correlates of Buddhism in a Thai Village. In *Dialectic in Practical Religion*, edited by E. R. Leach, pp. 41-121. Cambridge University Press.
- Tanabe Sigeharu. 1979. Rice-Growing Technology and Land Tenure in the Chao Phraya Delta: A Case Study in Phakthan, Singburi Province. In *A Comparative Study of Paddy Growing Communities in Southeast Asia and Japan*, edited by M. Kuchiba and L. E. Bauzon. Tokyo: Toyota Foundation.
- Terwiel, B. J. 1994. *Monks and Magic: An Analysis of Religious Ceremonies in Central Thailand*. Bangkok: White Lotus.
- 友杉 孝. 1977. 「タイ上チャオプラヤーデルタ農村における賃労働の変化」『アジア経済』18(6-7): 81-95.
- Tomosugi Takashi. 1980. *A Structural Analysis of Thai Economic History*. Tokyo: Institute of Developing Economies.